

岸之本南遺跡発掘調査概要

——府営農地開発事業「東条地区」に伴う発掘調査——

1999.3

大阪府教育委員会

はしがき

富田林市の南東に位置する「龍泉」の地は、標高280mを超える「嶽山」がひと
きわ高くそびえることで有名なところであります。

岸之本南遺跡は、「嶽山」の東麓を流れる佐備川を越えたところにあります。

調査で出土した「初期須恵器」は、朝鮮半島から我国に製作技術が伝わって間も
ない頃のもので、大変貴重な資料です。

なぜこの地に「初期須恵器」が伝わったのか、この地に暮らした人々が須恵器生
産とどのような関係があるのかなど、今回の調査は、多くの新たな課題を我々に与
えてくれました。

本書が地域の歴史研究の資料となり、文化財の大切さをご理解いただく一助とな
れば幸いです。

なお最後になりましたが、今回の調査に際し、深いご理解とご協力を賜りました
大阪府南河内農と緑の総合事務所、富田林市東条地区土地改良区及び地元の皆様に
記して感謝します。

平成11年3月

大阪府教育委員会

文化財保護課長 鹿野一美

例　　言

1. 本書は、富田林市龍泉に所在する府営農地開発事業「東条地区」に伴う岸之本
南遺跡の発掘調査概要である。
2. 本調査は、大阪府環境農林水産部の依頼を受け、大阪府教育委員会事務局文化
財保護課が実施した。
3. 現地調査は先に確認調査を行い、本府環境農林水産部と協議の上、本調査範囲
を確定した。
4. 確認調査から本調査終了までに要した期間は、平成10年8月28日から平成11年
3月31日までである。
5. 確認調査は文化財保護課調査第1係主査廣瀬雅信が、本調査は同技師橋本高明
を担当者として実施した。
6. 本書に使用した座標は、國土座標第VI座標系に基づく、標高値は、東京湾標準
潮位値(T.P.値)である。北は、座標北を指す。
7. 本書の執筆、編集は橋本が行った。

目 次

本文 目 次

I. 調査に至る経過.....	1
II. 環境.....	2
III. 調査成果.....	3
IV.まとめ.....	9
報告書抄録.....	10

挿 図 目 次

第1図 調査地位置図.....	1
第2図 周辺遺跡分布図.....	3
第3図 土層図.....	4
第4図 出土遺物図1.....	6
第5図 出土遺物図2.....	7
第6図 出土遺物図3.....	7
第7図 出土遺物図4.....	8
第8図 出土遺物図5.....	9
第9図 出土遺物図6.....	9
第10図 平面図.....	11~12
第11図 建物1平・立面図.....	11~12
第12図 井戸遺物出土状況図.....	11~12

図 版 目 次

図版1 調査地全景
図版2 建物1・井戸
図版3 出土遺物
図版4 出土遺物
図版5 出土遺物
図版6 出土遺物

I. 調査に至る経過

今回発掘調査を実施した岸之本南遺跡の周辺は、昭和61年度より大阪府営の農地開発事業（東条地区）が進められてきた地域である。この事業に伴って大阪府教育委員会では事業地全域の分布調査を昭和62年度に実施している。

現在は、佐備川右岸の「岸之本」及び「草野」の集落の東側に見られた南北にのびる丘陵の100ha以上は農地造成及び区画整理され、丘陵のはとんどの部分が旧地形をほとんどとどめていない。

今回の調査地も一連の農地開発事業の中で造成された丘陵部から丘陵に沿って北流する佐備川を越えて、佐備川の左岸を南北に走る府道甘南備川向線に通じる農道の予定地にあたる。

平成9年度に大阪府環境農林水産部より農道設置工事についての事業計画が照会され、調査方法について協議を行い、当地域周辺（特に佐備川右岸）の調査例が少ないとから、本調査に先だって確認調査を実施し、その結果を踏まえて本調査の有無及び範囲を確定することとした。

確認調査は、平成10年9月に実施した。2m×2mのグリッドを4箇所（No.1～4）を調査対象地に設定し、調査したところNo.1・3から遺物包含層及び溝・ピット等遺構を確認した。その他のグリッドは、耕作土直下に砂層・砂礫層が認められ、佐備川の氾濫源にあたるものと判断された。本調査範囲は、農道幅7m、延長48m、面積336m²となった。

なお、環境農林水産部と教育委員会の間で本調査に関する「覚書」を締結した後に、本遺跡が龍泉東遺跡ではなく、岸之本南遺跡の範囲に含まれることが判明した。従って、本書は「岸之本南遺跡発掘調査概要」とする。



第1図 調査位置図

II. 環境

岸之本南遺跡の所在する富田林市龍泉は、西に標高282.1mの嶽山、東に標高160mの佐備の丘陵に挟まれた谷間に位置する。谷間の中央を佐備川が蛇行しながら北流し、その両側の丘陵の縁辺部分に小規模な集落が点在する。右岸には、「岸之本」、「草野」、左岸には「上佐備」、「竜泉」がある。

岸之本南遺跡は佐備川の右岸、佐備の丘陵の麓に位置する「岸之本」の集落と「草野」の集落のほぼ中間にある。

從来、佐備の丘陵上には遺跡は確認されておらず、すでに農地造成によって旧地形は大きく改変されている。周辺の遺跡の分布は、佐備川の両岸や嶽山に集中している。

佐備川右岸では、北から81岸之本遺跡、82岸之本南遺跡、84佐備川A地点遺跡、86中・近世の墓地が確認された甘南備遺跡、奈良時代から中世にかけての集落跡が確認された167西明寺遺跡がある。左岸では、北から80佐備川西岸遺跡、83竜泉東遺跡、85佐備川B地点遺跡、88浦川東遺跡がある。これらの遺跡群は、佐備川の両側に形成された自然堤防上に立地するものと考えられるが、調査例が乏しく遺跡の性格、時期については、今後の調査を待たねばならない。

次に嶽山の様相は、頂上付近に93嶽山山頂遺跡、94竜泉寺城跡、中腹に90竜泉寺、南東の山裾には嶽山遺跡がある。嶽山の遺跡群は、山頂遺跡からは若干の繩文時代の遺物を出土しているものの、基本的には中世以降の竜泉寺、竜泉寺城跡関連の遺構・遺物が中心である。

- (1) 府営東条地区農地開発事業に伴う「甘南備遺跡発掘調査概要・1」1990.3 大阪府教育委員会
- (2) 「嶽山遺跡発掘調査報告書」1981 嶽山遺跡発掘調査団 富田林教育委員会
- (3) 富田林市埋蔵文化財調査報告11「嶽山山頂遺跡発掘調査報告書」1985.2 富田林市教育委員会

III. 調査成果

1. 基本層序と微地形

第I層：表土層（20～30cm）現代の耕作土層である。

第II層：淡灰色砂質土層（20cm）近世以降の耕作土層であろう。陶磁器が少量含まれている。

第III層：淡灰茶色砂質土層（20cm）中世以降の耕作土層であろう。瓦器が少量含まれる。

第IV層：黒灰色粘質土層（10～15cm）初期須恵器等を含む古墳時代の包含層である。

第V層：暗黒灰色粘質土層（10～20cm）第IV層にかわって東側に見られる。

第VI層：淡灰黄色砂層、古墳時代遺構面のベースとなり、自然堤防の上部を形成している。

上面には、西側では古墳時代の遺構が、東側では足跡が顕著に認められる。

第VII層：淡灰黄色粘質土層、調査区東端に見られ、西に向かって傾斜している。洪積段丘の傾斜と考えられる。

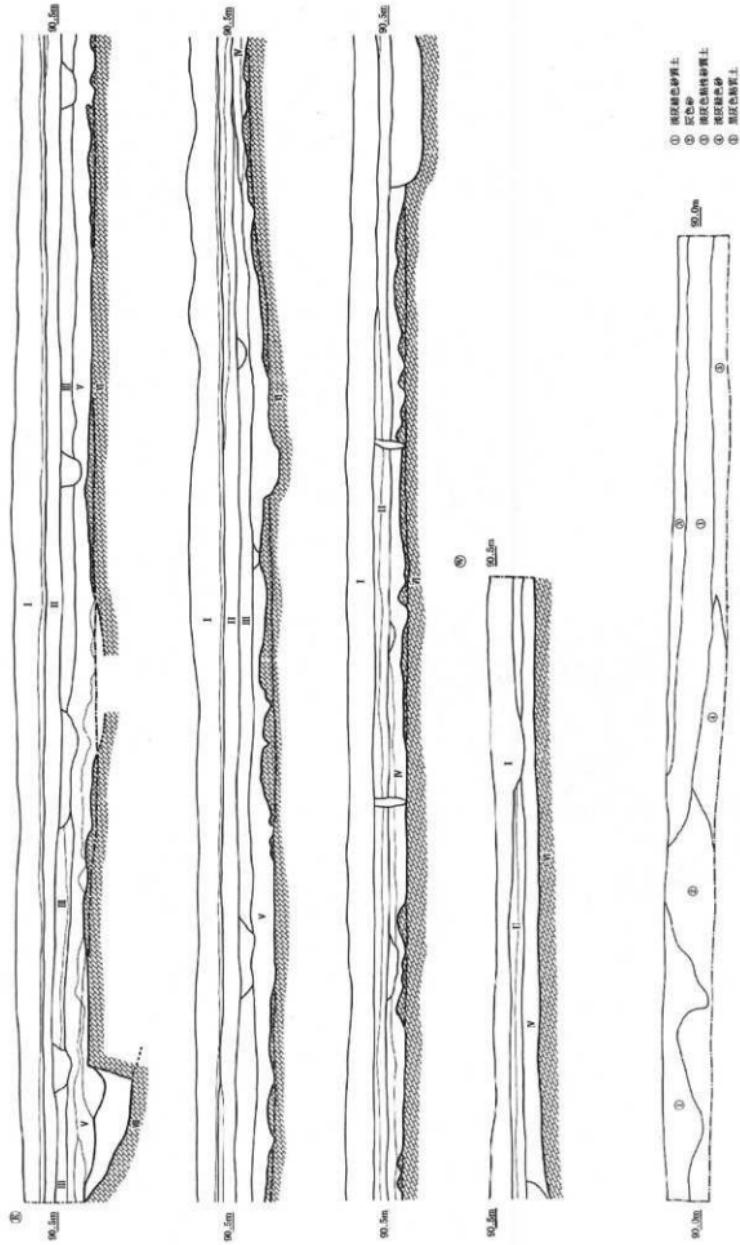
当遺跡は、佐備川の右岸に形成された自然堤防上に立地している。遺構面は、調査地西端から東へ約20mは堤防上部にあたり平坦である。その東側は緩やかに下降し、調査地の東端で丘陵部分と接するところまでは後背湿地であろうと思われる。

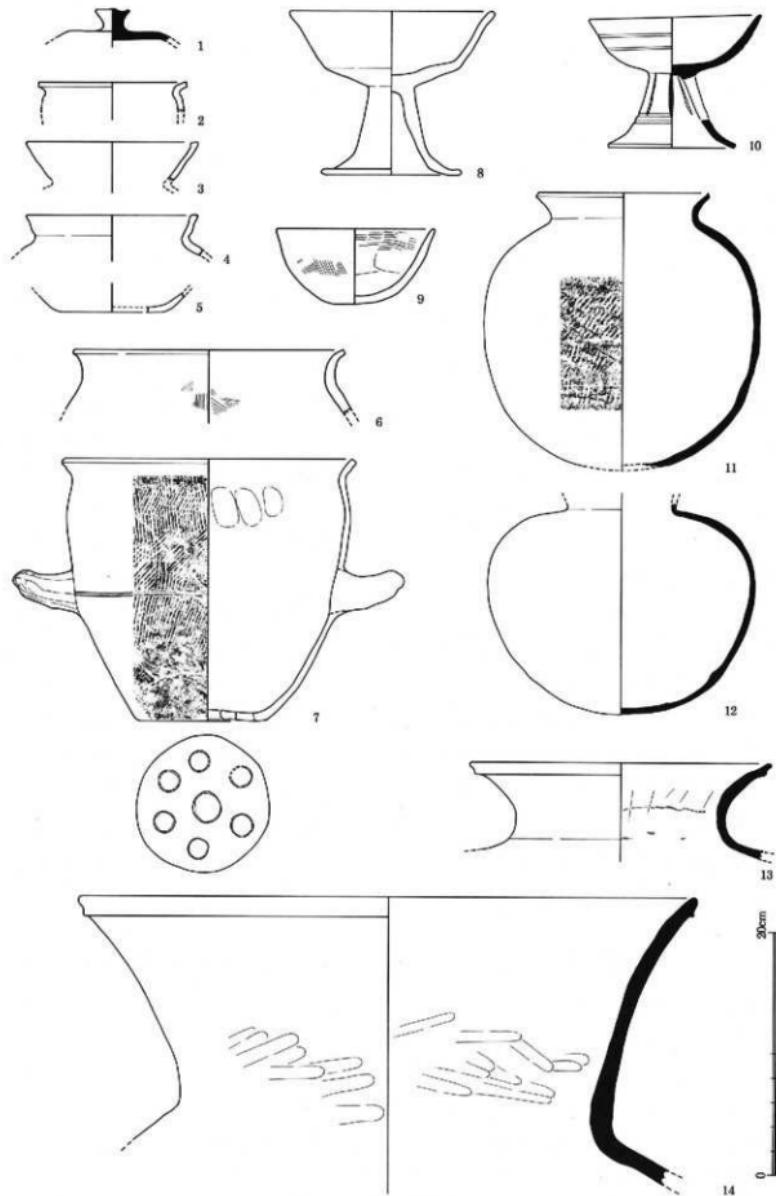


第2図 周辺遺跡分布図

第3図 土層図

1:50





第4図 出土遺物図1

2. 遺構と遺物（第5、8～10図）

今回の調査で検出した遺構は、ピット、建物、土坑、井戸、溝である。各遺構は調査区西側の一段高くなった自然堤防上に集中的にみられた。

井戸 建物1の東にあり、平面形は上端が一辺3.2mの隅丸方形で、下端が円形に近い不定形である。深さは2.4m、で埋土は大きく三層に分かれ上層から黒褐色粘質土層、暗茶褐色粘質土層、暗灰色砂質土層である。上層と下層上面から遺物が出土した。特に下層上面からは、完形品およびそれに近いものが集中して出土した。平面形の上端が方形であること、ベースが砂層であることから井戸使用時には井戸枠が組まれていた可能性が高い。もし、井戸枠が存在したとすれば下層の暗灰色砂質土層は井戸枠の「裏込め土」および井戸壁の「崩落土」であり、その上部に土器を集中的に投棄したと考えられる。

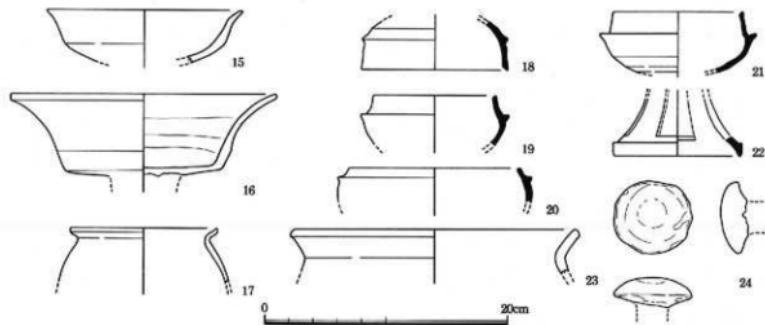
遺物は1～6は上層から、7～14は下層上面から出土した。1は須恵器蓋である。天井部外面は回転ヘラケズリ、つまみ部および接合部は回転ナデを施す。色調は内外面共にぶい赤褐色である。2～4、6は土師器甕である。3は口縁端部を肥厚させる「布留式」の甕である。色調はぶい橙色である。7は、「韓式系土器」の甕である。調整は、口縁部および内面はナデ、体部外面は上半はタキ、下半はヘラケズリ、底部外面はナデである。体部中央に付く「とっ手」は、体部を成形した後、沈線で位置を決め、体部をくり抜いて差し込んでいる。8は土師器高杯である。全体に器壁が厚く、シャープさにかける。脚部の内面は横方向に削っている。その他の調整は、ヨコナデかナデである。色調は橙色である。9は土師器の鉢である。調整は、内面上部と外側の一部に粗いハケが認められる。色調は、橙色である。10は須恵器高杯である。杯部には二本の沈線が巡る。脚部の「スカシ」は八本の切り込みである。「スカシ」の下部に段を付け脚柱部と脚部を区分している。調整は、杯部の下の沈線より下方は回転ヘラケズリ、その他は回転ナデである。色調は褐灰色をベースにして部分的にぶい橙色が混じる。11～14は須恵器の甕である。11は体部外面に斜め方向のタキがある。内外面共に自然釉がかかる。色調は紫灰色である。12は内外面共に回転ナデ。13、14は大きく開く口縁部の外面に凸帯が付く。外面と口縁部内面上半の調整は回転ナデ、口縁部内面下半から頸部にかけてはナデである。共に軟質である。色調は橙色である。

ピット群及び建物跡

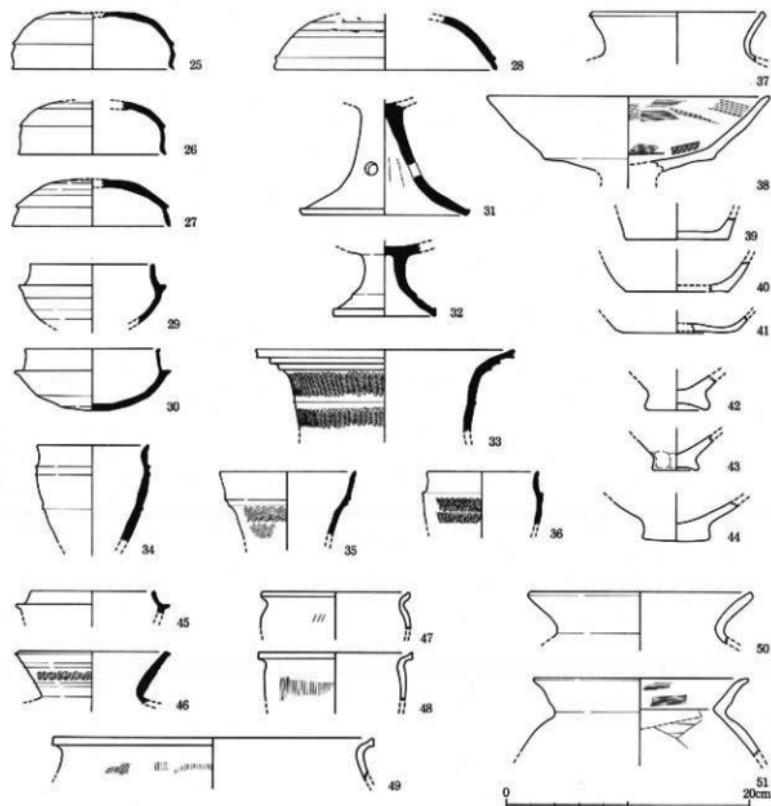
ピットは50個程度確認した。相対的に出土遺物は少なく、掘立柱建物を構成するもの以外からはほとんど検出していない。建物は2棟確認した。

建物1は、2間×2間の縦柱建物である。柱穴は、それぞれ円形に近い不定形を呈し、直径、深さ共に30cm前後である。埋土は、暗茶褐色粘質土である。ベースが砂層であることから建物の重みでベースに数cmくい込んだ柱痕が顕著に認められた。直径は10cm程度である。

遺物は、ピット10、15、18から出土した。15、16は土師器高杯である。17は土師器甕である。口縁端部を上方に小さくつまみ上げている。15、17はピット10とピット15出土のものが接合した。



第5図 出土遺物図2



第6図 出土遺物図3

建物 2 は、調査区の南端に建物の一部認められるものである。建物 1 と方向や埋土および柱穴の規模がよく似ていること、柱痕が認められることから掘立柱建物の一部であると考えた。

遺物は、柱穴から土師器細片が少量出土した。

土坑は浅い窪地状のものも含めて10箇所程度認められた。平面形、規模などさまざまである。

土坑 1 は深さ10cm程度、不定形を呈する。埋土は、暗褐色粘質土である。建物 1 のピット10との切り合い関係は土坑 1 が新しい。

遺物は少なく、須恵器と土師器を少し出土した。18は須恵器蓋、23は土師器甕口縁部である。

土坑 2 は深さ10cm程度、楕円形に近い不定形である。埋土は、暗褐色粘質土で少量の炭が混じる。建物 1 の柱穴ピット12との切り合い関係は土坑 2 が新しい。

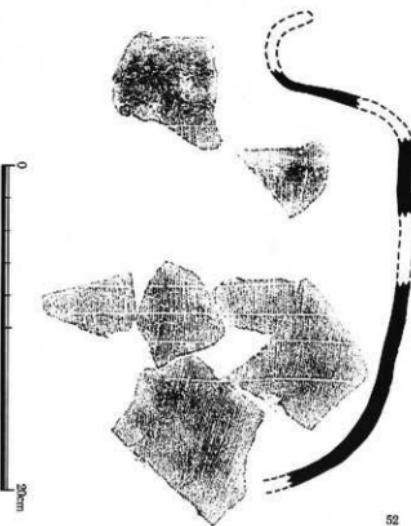
遺物は、須恵器、土師器、製塙土器および土製品が出土した。19~21は須恵器杯19、21の体部外面下半は回転ヘラケズリ、20は不明。22は須恵器高杯脚部である。24は土師質の土製品である。円盤状の下部に断面形が円形のものがはずれた痕跡がある。完形品であれば「きのこ」形を呈していたと考える。須恵器の甕などの成形過程の「タタキ」の「あて具」の可能性が高い。

黒色粘土層出土遺物 25~28は須恵器蓋である。調整は天井部外面は回転ヘラケズリ、その他は回転ナデである。28は天井部外面に「刻み目」文がみられる。色調は25~27は灰色、28は灰白色である。29・30は須恵器杯である。底部外面は回転ヘラケズリ、底部内面はナデ、その他は回転ナデである。色調は、灰色。32は須恵器高杯である。脚部外面に一条の段を持ち、脚柱部と脚部を区別する。脚端部外面に面を持つ。調整は外面は回転ナデ、内面はナデである。

色調は、青灰色である。33は須恵器壺である。口縁部外面に3条、頸部外面に1条の凸帯を巡らす。頸部の凸帯の上下に波状文を巡らす。色調は、青灰色である。34~36は須恵器の「コップ」型の鉢、35は甕かもしれない。それぞれ口縁部直下に凸帯を巡らす。34・35は二条、36は一条。35・36は凸帯の下方には波状文が認められる。色調は灰色である。

37は須恵器甕である。調整は回転ナデ。色調は、灰色である。31・38は土師器高杯である。31は円形の「スカシ」が三ヶ所みられる。

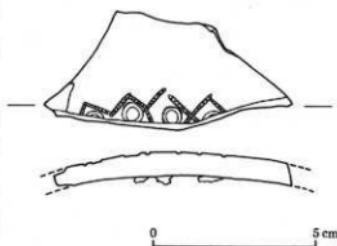
38は内面の調整はハケ、外面はヨコナデである。色調は橙色である。39・40は土師器の平底の底部片である。ススが付着したり、火を受けたりしていることから甕か甕の底部と思われる。41は形態的には39・40と似ているが瓦質である。52は繩蓆文土器である。



第7図 出土遺物 4

53は須恵器壺の体部片である。円と線を組み合わせた特異な文様である。42～44は後期の弥生土器の底部である。54は石包丁である。56は石鎌である。

暗黒灰色粘土層出土遺物 45は須恵器杯である。46は須恵器壺の口縁部である。外面に波状文がみられる。47～51は土師器甕である。47～49は口縁端部を上方につまみ上げる。体部外面に粗いハケ目が残る。50・51は「く」の字に外反する口縁部で、51は体部内面にヘラケズリがみられる。色調は47・48が褐灰色、49～50が橙色である。



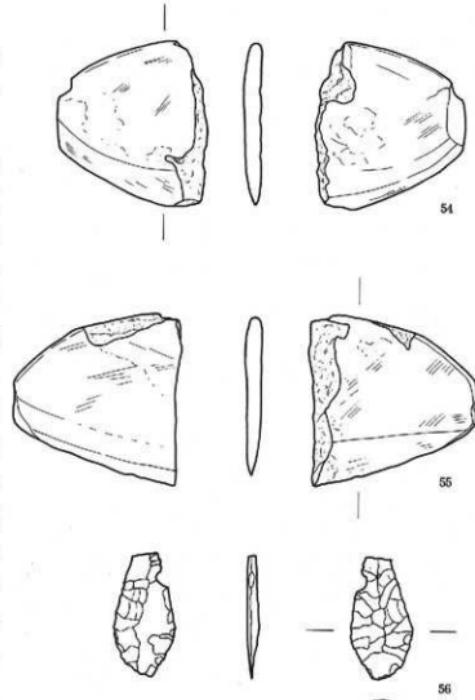
第8図 出土遺物図5

IV まとめ

今回の調査で検出した構造・遺物からこの狭小な土地の利用過程を概観することにする。

包含層の遺物をみると弥生前期まで遡る可能性のある石包丁55が、一点自然堤防を形成する砂層の上部から出土している。これが今回の調査で出土した最も古い遺物である。中期の石包丁が1点、弥生時代は後期の土器が数点と石鎌1点、古墳時代の包含層に混じって出土した。古墳時代にこの地が利用されるようになるのは、五世紀の初期須恵器の段階である。建物、井戸等を検出したこの集落は、一般的な集落で須恵器が日常的に使用される時期でないこと、土坑2から出土した土製品24が須恵器製作用具の可能性が高いことから須恵器製作集団の「ムラ」を考えることができる。

ただし、陶邑窯跡群内で確認されている初現的な須恵器生産にかかわった集落（万崎池遺跡、小阪遺跡、伏尾遺跡、大庭寺遺跡）をみると、集落内からひずみのある須恵器や窯壁が出土したり、須恵器生産開始以前からその地に暮らす集団の一画に須恵器作りの痕跡を残すなど岸之本南遺跡にはみられない



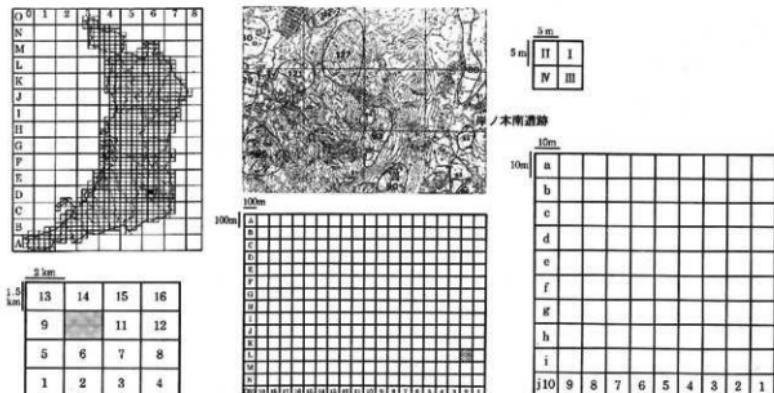
第9図 出土遺物図6

い様相がある。

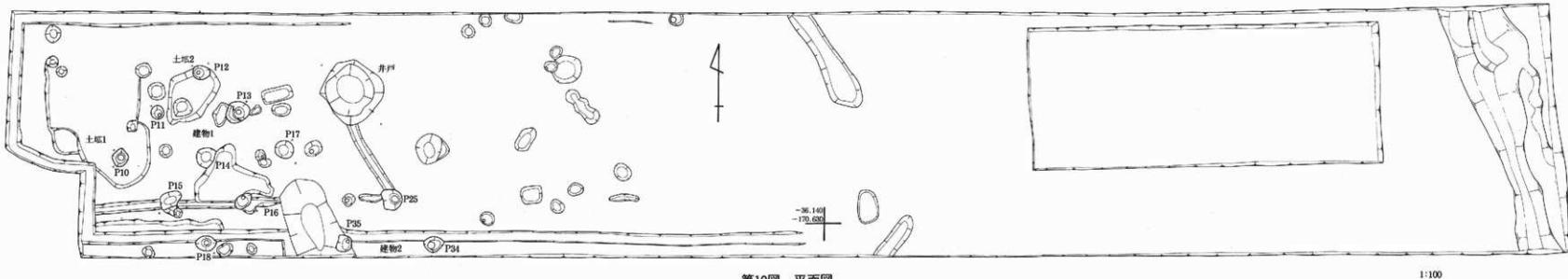
いずれにしろ自然堤防上の狭小な土地に、弥生時代以降断続的に集落が形成されたことは、この土地が比較的安定し、生活に適していたことをあらわしている。堤防上の小高いところに居を構え、後背湿地を利用して水田經營をしていたことがうかがえる。

報告書抄録

ふりがな	きしのもとみなみいせきはっくつちょうさがいよう						
書名	岸之本南遺跡発掘調査概要						
副書名	府営農地開発事業「東条地区」に伴う発掘調査						
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	橋本高明						
編集機関	大阪府教育委員会 文化財保護課						
所在地	〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 ☎06(6941)0351						
発行年月日	1999年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村・遺跡番号	北緯 °°'	東経 °°'	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
きしのむなみ 岸之本南 いせき 遺跡	富田林市 龍泉	27214	34° 27' 42"	135° 36' 26"	1998年12月14日 ～ 1999年3月31日	336m ²	府営農地 開発事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
岸之本南遺跡	集落遺跡	古墳時代 中期	掘立柱建物、井戸 土坑		須恵器、土師器 韓式土器		

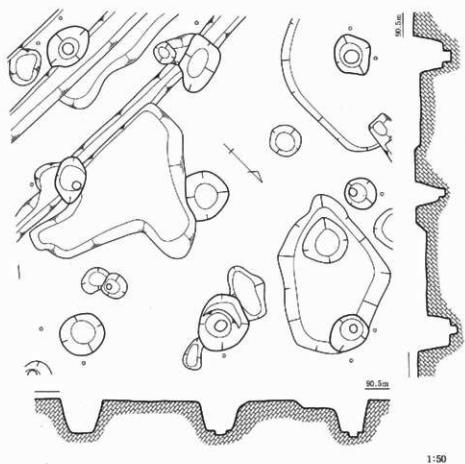


岸之本南遺跡地区割表示図

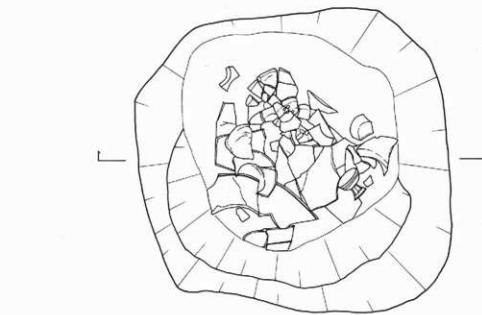


第10図 平面図

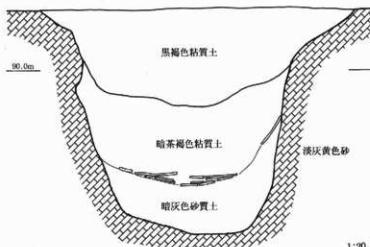
1:100



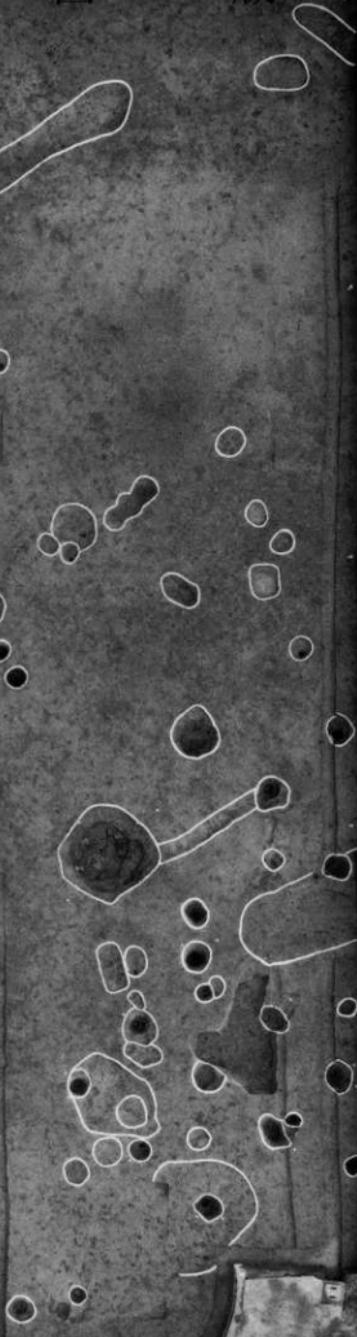
第11図 建物1平・立面図



第12図 井戸遺物出土状況図



図版



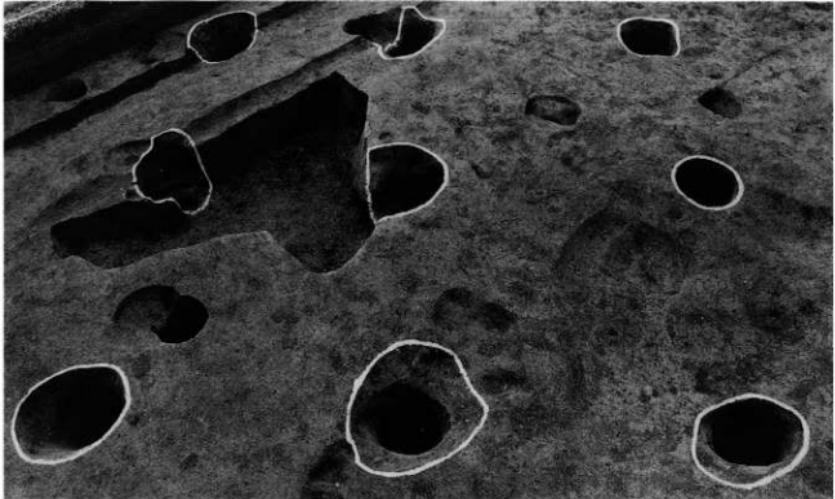


北から



西から

图版二
建物 1・井戸



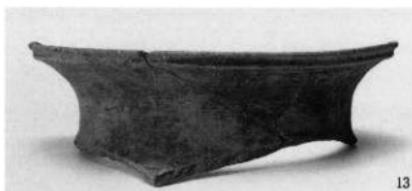
建物 1



発掘状況



出土状況



13



12



11



10



8



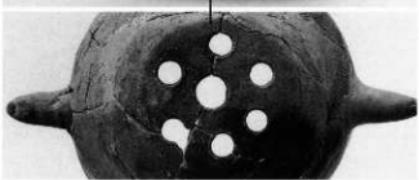
14



7



1



9



16



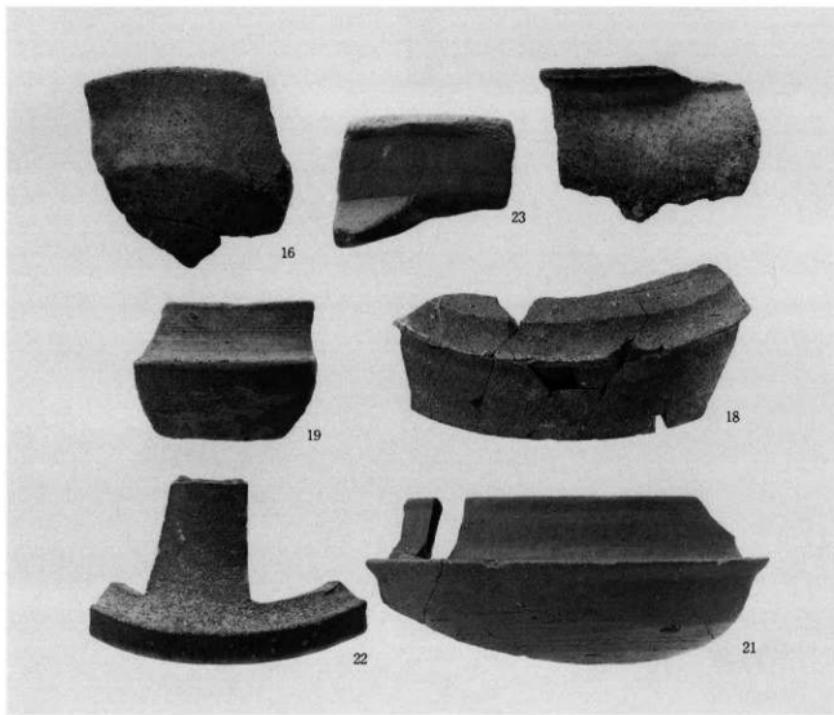
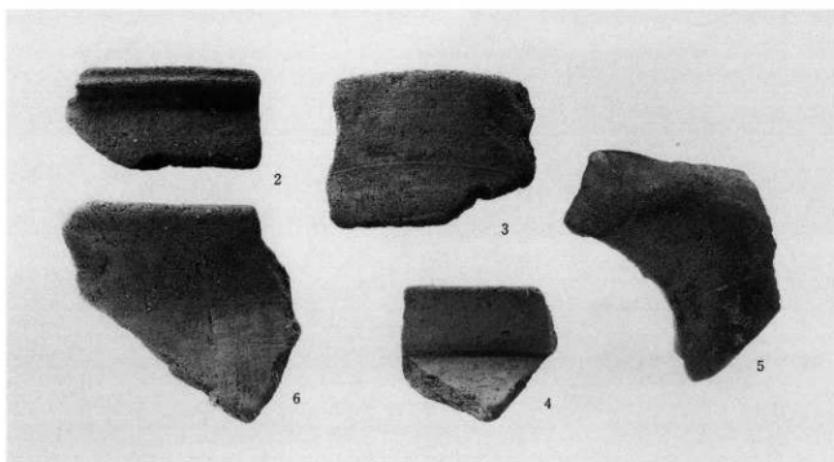
31

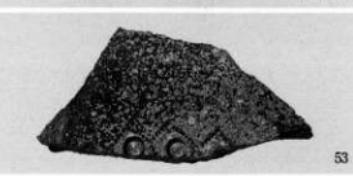
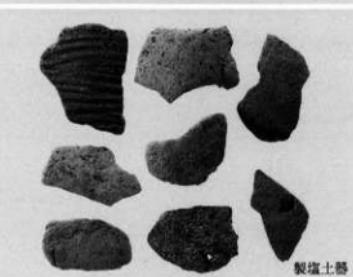
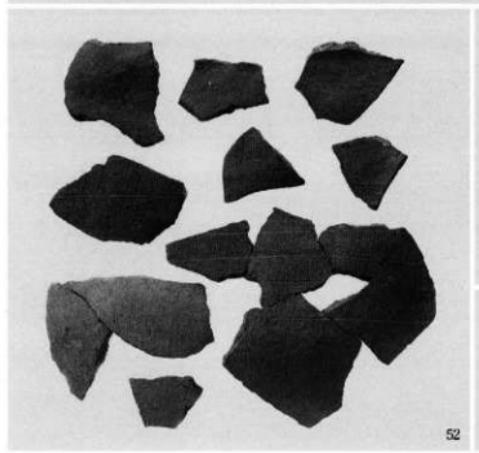
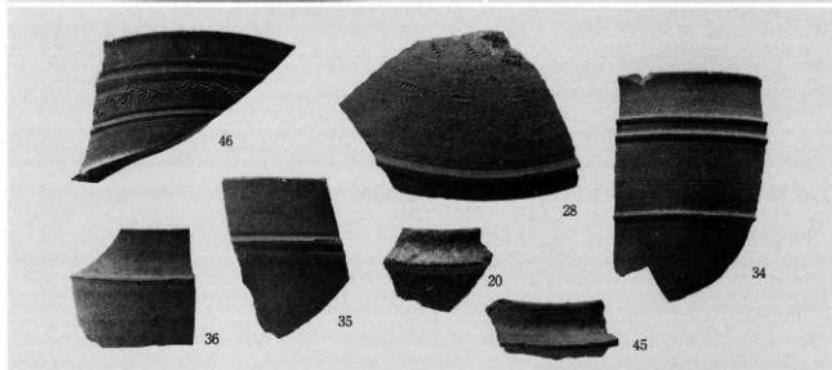


33

24

圖版五
出土遺物





53

